

2013.10.26 Arts Maebashi Grand Open

アーツ前橋 開館記念展

「カゼイロノハナ 未来への対話」

プレスリリース

開催概要



平成25年8月22日

アーツ前橋 開館記念展

「カゼイロノハナ 未来への対話」

平成25年10月26日(土)～平成26年1月26日(日) 全73日間

カゼイロノハナ 未来への対話

口語自由詩という新しい表現の道を切り拓いた詩人・萩原朔太郎をはじめ、前橋には独自の道を歩む創造的な人々が数多くいます。この地域では、赤城山から吹く「風」によってそうした個の強さが育まれ、さまざまな表現の「華」が生み出されてきました。

本展のタイトルは、今年は朔太郎が詩壇に登場してちょうど百年にあたり、その年に作成された「ソライロノハナ」という自筆本の題名にちなんで付けました。



アーツ前橋外観



山口薫(1907-1968)《沼のある牧場》
1964年 105.6x255.5cm 前橋市蔵

本展では、この地域にゆかりのある美術作家、文学者、音楽家や科学者など幅広い分野の人たちが歴史的に積み重ねてきたクリエイティブな仕事を、現代の芸術家たちが再解釈して作品をつくりあげます。

これらの作品は、時代やジャンルを超えた対話によって私たちの未来を切り拓く新たな価値観を提示するものであり、近代的な合理主義を再考し、震災などの大きな危機を経験した現代社会における新たなアートの役割を模索することで、過去から未来への架け橋になることを目指しています。

また、本市収蔵作品の展示や、館外に広がる地域アートプロジェクトなども一緒にお楽しみください。

出展作家(50音順)39作家

有村真鐵、池田政治、砂盃富男、牛嶋直子、小野田賢三、小見辰男、加藤アキラ、カナイサワコ、金子英彦、木暮伸也、黒田六造、小泉明郎、近藤嘉男、佐藤正幸、塩原友子、清水刀根、白川昌生、須藤和之、反町博彦、高橋常雄、田中青坪、司修、照屋勇賢、富田文隆、中村節也、南城一夫、林哲也、福沢一郎、福田貂太郎、ペ・ヨンファン、前島美江、ましもゆき、三輪途道、村田峰紀、茂木紘一、八木隆行、山口薫、横堀角次郎、横堀艸風

本展のみどころ

I. 収蔵品と若手作家

前橋市では全国レベルで活躍した地域ゆかりの作家の作品を収蔵しています。本コレクションの中から、前橋の今を生きる作家たちが自らの感性に呼応する作品を選び取り、新たな作品を展開させます。例えば、高橋常雄の《れんげつつじ(赤城)》から、ましもゆきが壁面を使った大きな新作に挑戦します。



ましもゆき(1984ー、前橋生まれ)
《前夜祝》
2008年 91x182cm Yuka Sasahara Gallery提供



高橋常雄(1927-1988)
《れんげつつじ(赤城)》
80.3x99.5cm 前橋市蔵

同じく前橋市出身の牛嶋直子は、南城一夫の作品から想を得ながらも独自の世界を構築します。



牛嶋直子(1979ー、前橋生まれ)
《光の庭》2013年 145.5x145.5cm



南城一夫(1900-1986)
《釣り人》1976年 45.6x33.5cm
前橋市蔵

II. 前橋の才能と現代作家

前橋市出身のクリエイティブな才能をそれぞれの専門領域で確立した人たちに注目をし、現代作家の作品を通じて、新たな芸術的手法で過去に光を当てます。

童謡「チューリップ」や「うみ」などの作曲で知られる井上武士(1894-1974)を小野田賢三(1961-)が新しく解釈をします。また、日本スキー界の先駆者として知られ、赤城山での日常を通じて新たなライフスタイルを提示した猪谷六合雄(1890-1986)の手仕事に着目し、八木隆行(1971-)は会場内にモバイルハウスを作り出します。群馬の地域性に新たな芸術の可能性を見いだす白川昌生(1948-)は、市民科学者として原発事故で注目された高木仁三郎(1938-2000)の活動を追うことにより、現代日本の抱える問題を浮き彫りにします。

菌類の研究で有名な角田金五郎(1858-1943)への関心からカナイサワコが新たな作品を制作します。



カナイサワコ (1982-、前橋生まれ)
《漕ぎ出す時に見る景色》 2012年

『死刑宣告』などの詩集で知られる詩人・萩原恭次郎(1899-1938)の作品は、佐藤正幸がタイポグラフィデザインを行うことにより、新たなイメージを獲得します。



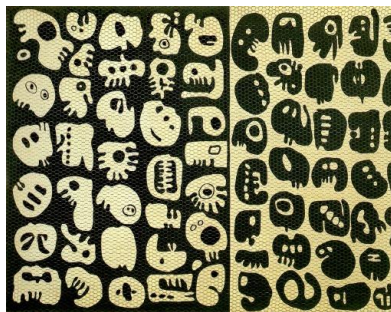
佐藤正幸 (Maniackers Design) (1974-)
《萩原恭次郎「露台より初夏街を見る」
ポエトリミックスポスター》
2012年 103.0x145.6cm

III. マエバシの戦後前衛運動

1960年代には、NOMOグループの出現や野外展の開催など、街のなかでプロジェクトを実施する運動が起きます。規範的な美術とは別の価値観を求める前衛運動を、社会の変化や地域性と結びつけて紹介します。



金子英彦(1924-2010)
《退屈する人》
1965年 162.0x130.0cm



砂盃富男(1930-2001)
《題不詳》
1964年頃 91.0x117.0cm

IV. 震災後の新たなアートの形

戦争や震災のような危機の後にくる復興期にアートが果たす役割を考えます。空襲の被害を受けた前橋の戦後に画家・近藤嘉男が開いた私塾や、東日本大震災のあとで前橋に滞在したアーティストが制作した作品を紹介します。



近藤嘉男(1915-1979)
《作品A》1948年
162.1x130.4cm 前橋市蔵



ペ・ヨンファン(1969-)
《オブジェクト/福島のため息1》(右)
2012年 100x36.5x9cm
《オブジェクト/福島のため息2》(左)
2012年 58.0x19.5x5.0cm



小泉明郎(1976-)
《記憶術(父親)》
2010年-2011年



照屋勇賢(1973-)
《自分にできることをする》
2011年 作家/里親蔵

V. 地域アートプロジェクト

① マチリアルプロジェクト

ドーナツ化現象によって人口が減った市街地中心部に新しい活動の拠点をつくるプロジェクトと、さまざまな市民の活動を同時に紹介します。



前橋を中心に活動する建築家やデザイナーのシェアオフィスFRASCO



ya-gins vol.03 杉本篤「CAPTURED IMAGES」
Photo : 毛利聡
現代アートを紹介する空間ya-gins(ヤーギンズ)

② ガーデニングプロジェクト

「メディカル・ハーブマン・カフェ・プロジェクト in 前橋」

薬草の効能が分かるように人体のかたちをしたウッドデッキのガーデンを製作。そこでいろいろな市民が休憩をしたり、マルシェなどのイベントを開催していく場を生み出す。



③ ダイニングプロジェクト「風の食堂」

前橋の自然風土の特徴である「風」。その風によって旨味や栄養が凝縮したさまざまな乾燥食材が作られています。また、日常で食されているものを調べる増田拓史(1982-)やスペイン人アーティスト、フェルナンド・ガルシア・ドリー(1978-)が参加します。

④ 衣プロジェクト

生糸の街として栄えた前橋には日常生活の近くに糸の文化があります。服を使ったコミュニケーションを試みる西尾美也(1982-)や刺繍の作品で知られる伊藤存(1971-)が参加予定です。

VI. コミッションワーク

コミッションワークは、アーツ前橋の建築に合わせてアーティストが制作した恒久設置作品です。館内・館外に設置されています。開館に際して、4作家・6作品をお楽しみいただけます。

① 廣瀬智央(1963-)

1963年東京生まれ。私たちの身近にある素材を使って、見るだけでなく、匂うこと、食べること、触ること、といった諸感覚に訴えかける作品や、異なる民族や文化間に潜む共通領域や差異、日常生活の小さな事象や豊かさに触れる作品を発表している。ミラノと東京を拠点に活動を行う。



©HIROSE Satoshi/photo:KIGURE Shinya

《空のプロジェクト：遠い空、近い空》

2013年

屋上看板4面 / DVDループ映像(アーカイヴモニター)

どこに居ても同じように見える空。しかし、よく見ると天候や季節、あるいは私たちの心の変化によってすべて違って見えます。ミラノ在住の作家と前橋市内の母子生活支援施設「のぞみの家」の子供たちが、〈空の交換日記〉を通じてお互いが見ている空の写真をやりとりしました。その写真が本当の空を背景にした屋上看板と、館内のモニターでご覧いただけます。

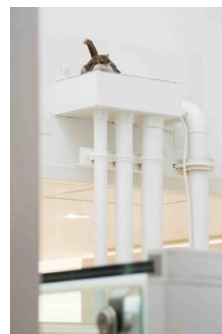
②山極満博(1969-)

1969年長野生まれ。自分と世界のあいだに横たわる距離や、見る/見られることをめぐって様々なメディアを使った作品を発表している。十和田市現代美術館に複数の作品が恒久設置されている。



①《ちいさなおとしもの》
2013年

②《うんどうといどう》
2013年
有料スペース内に設置



③《うちのそと》
2013年



上記いずれの画像も©YAMAGIWA Mitsuhiro/photo:KIGURE Shinya

自分とは別の誰かがいる気配を感じるような作品が3点展示されています。誰かがそっと自分を見ているのではないかと、考えると、世界の見え方が変わってきませんか？建物のつくりや機能に合わせて作品が置かれているので、ふと見上げたり、しゃがみこんでみたり、どこにあるのか探してみたり、展示室に置かれる作品とは違う接し方で楽しんでください。

③ TOKYODEX

複数のクリエイターが、所属し、屋内外の空間を使った美術作品や音楽などを使ったイベントを実施している。また、音楽などのイベント会場の演出や、ワークショップなど幅広く活動している。

コンセプト・アートワーク：西村タ貴

コンセプト・アートディレクション：笹井あかり



©TOKYODEX/ photo: KIGURE Shinya

《青い猫のいる街》

2013年

カフェの壁画、床面、ポスター掲示板のマグネット

萩原朔太郎の詩からインスピレーションを受けて、自由に空想の街を想像して描かれています。動物や植物が大きく描かれて、空想の世界が次々に重なりつつ、壁面全体につながっていくように広がっていきます。蝶が飛び回る様子を「てふ てふ てふ」(『恐ろしく陰鬱なる』より)、また犬の鳴き声を「やわあ」(『遺伝』より)と書くなど、印象的な擬態語も不思議な世界観を生み出すのに一役買っています。

④照屋勇賢(1973-)

1973年沖縄生まれ。ファーストフードや高級ブランドの紙袋を細かく切り刻んで樹木の形を作り出す作品や、沖縄の伝統工芸である紅型でよく見ると戦闘機や色鮮やかな鳥が描かれている着物の作品など、社会性の高いメッセージを込める表現で知られている。2011年には前橋市の招聘でアーティスト・イン・レジデンス事業に参加した。



《静のアリア》

2013年

有料スペース内に設置

©TERUYA Yuken / photo : KIGURE Shinya

隠れ家のような小さな空間で、来場者が心を落ち着かせて静かに過ごすことができる空間を作りました。このなかで災害時にしか目にしない非常階段を見ながら、社会のなかで芸術が果たす役割を想像してもらうことになります。「非常時の芸術 / 美術館の役割」について考えてもらう冊子を手にとり、2011年3月27日に群馬音楽センターで群馬交響楽団がおこなった演奏会の音(1日2回のみ再生)をぜひ聴いてみてください。そこにいた全ての観客と演奏者によって創り出された黙祷の静けさが再現されます。

主催 アーツ前橋

後援 朝日新聞前橋総局、産経新聞前橋支局、上毛新聞社、東京新聞前橋支局、日本経済新聞社前橋支局、毎日新聞前橋支局、読売新聞前橋支局、共同通信社前橋支局、時事通信社前橋支局、NHK前橋放送局、群馬テレビ、エフエム群馬、まえばしCITYエフエム

助成 平成25年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ、財団法人地域創造

会場 アーツ前橋 群馬県前橋市千代田町5-1-16

開館時間 午前11時～午後7時まで(入館は閉館の30分前まで)

観覧料 大人800円 大学生600円 高校生以下無料 団体料金600円(10名以上から)

※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方は無料
(付添人1人まで無料)

また、10月28日(月)「群馬県民の日」は無料。

休館日 毎週水曜日、年末年始(12月28日～1月4日)

関連プログラム

本展覧会開催に際して、参加作家を中心にアーティストトークやワークショップなどを予定しております。
また、12月14日(土)には、アーツ前橋開館記念事業として「アートと出会う(仮)」をテーマにシンポジウムを行います。

展覧会カタログ

今回の展覧会を伝えるためのコンセプトブックを制作

概要 前橋の紹介、作品紹介、前橋文化年表、作家インタビューなど

頁数 200ページ 日英バイリンガル(予定)

プレスの皆様へ

アーツ前橋開館に先立ち、10月25日(金)にプレス向け内覧会を開催いたします。詳細に関しては近日アーツ前橋ホームページ「プレス」に掲載予定です。

お問い合わせ

前橋市政策部文化国際課 アーツ前橋
担当：深代、今井

Tel : 027-230-1144 Fax : 027-232-2016

E-mail : bunka@city.maebashi.gunma.jp

Web : <http://artsmaebashi.jp/>

〒371-0022

群馬県前橋市千代田町5-1-16